

【明治 20 年の「須永元日記」】

須永元の日記は明治 17 年、同 21 年、同 22 年、同 38 年、同 39 年、同 42 年、昭和 13 年、同 14 年の 8 年分が遺されています。いずれも既製の日記帳が使用され、須永の生涯を知るうえで貴重な史料です。

これ以外に明治 20 年にも一月上旬だけですが日記が書かれています。ただ、日記帳にではなく、12 行取りの原稿用紙に書かれています。表紙に「記録（明治二十年）一月一日から同月十日まで 須永元」という題簽が貼られています。

【行餘舎開校式に伊藤博文書】

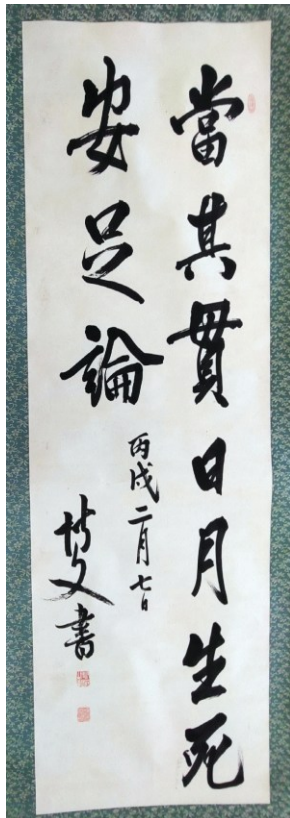
本文では「須永文庫研究」の一回目でふれた「行餘舎」の開校式などについて記述されています。

行餘舎は狭いので、開校式は地元にある宝龍寺という寺を会場に行われました。一月八日に執り行われた式の会場には、伊藤博文が書いたとされる書幅が掛けられました。

当日の日記にはこうあります。

正面懸「当貫其日月 生死安足論」之書幅、蓋伊藤總理之所書。其前安置皇帝陛下兩皇后之御影。

この時に飾られたとみられる書幅が須永文庫にあります。



ただ、「貫」と「其」が逆になっていて、こちらが正しいようです。

翻刻します。

「当其貫日月 生死安足論 丙戌二月七日 博文書」

これは、元王朝に徹底抗戦した南宋の政治家文天祥が獄中で書いたとされる五言古詩「正気歌」の一部です。

正気歌は、幕末の志士たちが愛誦したことでも有名です。

落款にある丙戌は明治19年で、伊藤は当時、初代の内閣総理大臣を務め、憲法草案の起草に着手していました。

【佐野英学校と同一】

「須永文庫研究」一回目で「行餘舎」について、「この行餘舎が発展解消したのか、詳細は不明ですが、佐野英学校が開校し、20年1月に式典が行われました」と書きました。行餘舎と佐野英学校との関係がよく分からなかったのこう書いたのですが、検討を進めていく中で、両者が同一である可能性が強いと判断するようになりました。

芹川哲世「須永元と朝鮮人亡命人士との交流——金玉均を中心として——」（『二

松学舎大学人文論叢』巻 99、2017 年 10 月）という論文でも須永の『輟斎詩稿』を引用しながら行餘舎が取り上げられ、「仲間と共に行餘舎（佐野英学校のことか）という英学校を設立し…」としています。

また、最近、国会図書館デジタルコレクションで行餘舎が英学校であることを裏付ける記述を見つけることができました。山室武甫『評伝山室富士』（救世団出版及供給部、1941 年）<https://dl.ndl.go.jp/pid/1041144>（参照 2025-09-02）にあるのですが、佐野町長などを歴任した近藤貞吉について「私立英学校行餘舎を卒へ…」とありました。

2025 年 10 月 22 日 広沢有久

須永文庫資料研究室のアドレスは <https://sano-haku.com/sunaga-bunko/>